
企画作品 A CAGED BIRD (仮)

雨宮 だりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

企画作品 A CAGED BIRD (仮)

【Nコード】

N3381H

【作者名】

雨宮 だりあ

【あらすじ】

仲間募集企画により、藤沢市の佐藤啓一くんの話、ということを書いていきます。ネタ出しのE先生の作品と揺れ幅が大きい方が面白いとは思ったものの、まったく藤沢市関係ねえし！といった風情になりましたことをご了承くださいませ(汗)

FLY TO THE STATION

問題文の主人公は、国立大学医学部を狙う浪人生である。
以下の文を読んで、問いに答えなさい。

佐藤啓一。

彼は普通の浪人生だった。

顔は並、成績も並、同級生をを苛めることも苛められることもなく、学芸会では主役でもなく草木でもなく、村の子供をやらされるような少年だった。人間にレベルがあるとすれば、多くも少なくもない友達もまた「並」ばかり。

可もなく、不可もない。そしてそれに不満や疑問を覚えたこともない。

ただ一つ、親が特殊な仕事で長年単身赴任していることだけが、他の同級生とは事情が違う。しかし飽くまで親は親だし、一生無関係に単身赴任し続けて終えるものだとばかり思っていた。

そんな極限に甘い考えは、浪人決定した春に覆された。

トンネルを抜けると、そこは雪国だった。
もちろん嘘だ。

啓一は、微かな耳鳴りを覚えながら、その地に足を下ろした。

硬質の床、無機質な壁。そして 窓の外の、宇宙。

ここはFUJISAWA CITY。日本単独で作られた宇宙ステーション内にある、藤沢市の姉妹地区だ。当然ながら東京都や種子島宇宙センターの持つ地区よりも格段に狭いが、藤沢市に拠点を置く巨大カンパニーが出資している面もあり、「FUJISAWA」の名は地球でも広く知れ渡っている。

FUJISAWAはステーション内では教育機関を主に担っており、将来的には小学校から大学、その先の研究施設までも一手に内

包する地区になる。既に施設としては完成を迎えており、一般人が
移り住むの手づくすね引いて待っている状態だ。

「暮らせるかつつうの」

当然の不満が口を衝く。

ここにはテレビもゲームもある。というより、トランクの中にゲ
ーム機とソフトを詰め込んできた。凝り性の自分のこと。一ヶ月の
期間限定とはいえ、コンプリート間近の恋愛シミュレーションとサ
ッカーチーム育成ゲームを放置できる訳がないという自信があった。
ここには図書施設はないが、コンピュータを操れば、漫画でも小
説でもダウンロードできる。週刊誌の漫画の先を知ることくらい、
なんていうこともない。

要するに、ちょっととした趣味を切れさせる心配はなさそうだ。
でも。

ここに、彼女はいない。

昨日の卒業式にて、喧嘩別れしそうになったばかり。もとい、彼
女の方は喧嘩別れ済みのつもりなのかもしれないが、こっちはまだ
そんなつもりもなく、追々フォローすればいいと油断していた。

帰宅してすぐ、半年振りに顔を合わせた父親に強制連行され、携
帯も取り上げられ、パソコンからメールしようにもアドレスもわか
らず……

いきなり地方に連れて行かれ、最小限の説明だけ受けて、いきな
りロケット発射！ だなんてさ。聞いたことねえよ。今生の別れく
らいさせろっての。

彼女がどう思っているかはわからない。

本当の意味で好かれていたのか、それとも本命が現れるまでの場
繋ぎくんだったのか。ともかく一つ言えることは、彼女は自分より
も少しはランクが上のタイプでありながら付き合ってくれた、奇特
な女の子だったということ。

なかなか可愛かった。クラスの女子十五人中で言うなら、五番目
くらい。でも明るくて発言力があって、男子十五人中で十番目くら

「ああん？」

そう。

キレて許されるタイプの人間が、ここに一人。
世間にとっては一流のヒーローであり、啓一にとっては一流のヒーローではない、鬼の父親。

儂く幼い反抗心は芽から摘み取られ、さりとて日常そこにいないことで、爆発するほどの被害も及ぼしてはこなかった、この父親だ。今彼は、額にわかりやすい青筋を立て、最後に手に取ったゲームソフトをバリツと二つ折りにした。

「お前はここに何をしに来た」

「ひっ」

「答える、私は忙しい」

「一般人が！ 混乱なく！ 居住するに耐えられる機能を持っているかテストするため！！」

「……ほお。さすが私の子だ。なら、ここに籠ってゲームされては困ることくらい、予想できるな？ 碌でもない遊びさえしなければ、ここに来ることもなかったろうに」

失笑を浮かべ、ついでにパジャマ以外の服も次々と放り込まれてしまった。

「俺の服！」

「ここでは常時制服を着用してもらおう。安心しろ、無事に日本に送り返しておいてやる」

なら、ゲーム機壊すことねえじゃねえかよ！

理不尽な父親に、異議を申し立てますか？

YES？

NO？

当然YESだ！ っって言えれば楽なんだけだな。するもんかよ畜生。

……要するに、アレだ。エリートの父としては、一人息子の不合格が気に入らなかった訳だ。俺だって、別に気に入って浪人する訳じ

ゆねえのに。で、どこでもいいから原因を俺以外に求めたくて、目に入ったのがゲーム機だったってことだよな？

あらら？ 俺、こんな洞察力あるタイプだったっけ？ まあいいよ、宇宙マジックってことでさ。

内心の劣等感を冗談にしている間に、父親は大きな袋をサンタのように肩に担ぎ、親指でクローゼットを指差した。

「五分後に戻る。そこに服があるから、すぐさま着替えておけ」
ピシャツとスライドドアが閉まり、静寂が訪れた。
なーんだ。

どっちにしろ、ゲームって感じじゃなかった。

いわゆる普通のテレビがない。トランクにテレビまでは入れられないから、自室に常備されていると信じての持参だったというのに、デスクにパソコンはあるが、つい先日まで受験生だった手前、オンラインゲームには手を出していない。父親のあの口振り。どちらにしても、そういう類のゲームはできない設定になっていそうだ。

銀色のパイプベッドに腰掛け、バサリと仰向けになった。腕枕で天井を眺め、現状把握しようとする。

重力はある。フワフワする感覚なんてどこにもないし、ここは至ってシンプルな、普通の部屋だ。ベッドの上掛けはブルー、あとはすべてが白か銀色で、インテリアと言える物は何一つない。

はっ

もう、二分経過していた。我に返って、バタバタとクローゼットから出した制服に着替え始めた。

FLY TO THE STATION (後書き)

なんかホントごめんなさい。捏造しすぎです。

もう少し知識があれば、もっとSF風味にしたいのですが、特に長編にする気もないので、そこまではいかないと思います。

A CREAM UNIFORM

父親が戻ったのはキッチンから五分後であり、あの私物の袋は消えていた。

「ちゃんと、配送してくれるんだろうな？」

そんな質問をすることもできず、カツカツと廊下を歩く父親の後ろを追った。

「あとう」

「なんだ」

「色々聞きたいんだけど、とりあえずコレ。こんなのが制服？」

啓一の身を包んだのは、クリーム色の作業服のようなものだった。上下がツナギで、工具箱でも片手に持ったらバッチリという風情。

ただし、工事現場にクリーム色はありえないから、この清潔感は制服のそれと言えなくもない。

「そつだ。問題ないという自信はあるが、ここは宇宙であり、あらゆる危険を配慮している。一般人が不用意にボタン一つ落としただけで、有事の際には重篤な結果をもたらすことも想定できるからな。長いタイやベルトも同じ。一番合理的だ」

「親父はスーツなの？」

「一般人が不用意に、と言ったろ？ 作業によってはツナギを着るが、私は一般人でもなければ不用意でもない」

「へえへえ」

パンピーとは確かに違うもんなあ、あらゆる意味で。

突っ込みはさておき、きりつとした説明は、確かに腑に落ちた。着る時もフアスナー一つで済んだし、ポケットもすべて小さなフアスナーが付いており、ウツカリ落とし物をするのも少なさそうである。

決してオシャレとは言えないが、実利の面では申し分ない。

「で、これからどこに？」

「授業だ。とはいえ、生徒はお前ともう一人。随時追加予定だが、ほぼマンツーマンで最先端の学問が受けられる。予備校よりも役立つぞ」

一般人である啓一とは違う、金のカードキーを探り出し、父親はピタリと足を止めた。

「F 252、TINKERBELL?」

F 252は、ドアプレートに直接箔押しされているが、TINKERBELLは女の子の可愛い造形文字であり、紙に書いた物を貼られている。

「先住者の趣味だ。お前は後輩、せいぜいうまくやるんだな」

シャツと扉が開き、中の全貌が明らかになった。

「わお、先生だ。いらっしやーい!」

「ああ。約束の同級生を連れてきた」

中のデスクでパソコンに向かって座っていた少女が、立ちあがって出迎えた。

「私の息子、佐藤啓一だ。ほんの一ヶ月のシミュレートだが、色々教えてやってくれ」

「アイサー!」

可愛らしく小首を傾げ、可愛らしく敬礼して見せた彼女は、本当に本当に、可愛らしいという言葉そのまま具現化したような容姿をしていた。

グサツ。

失恋直後にこの出会い。ヤバイだろ? 普通にさ。

「彼女は新藤美莎。私の上司の娘さんだ。くれぐれも粗相がないようにな」

背中をこっさりグーで押され、中に足を踏み入れる。

部屋は、無駄に広すぎるのを嫌ってのことだろう。パーティションで教室を半分以下に仕切られており、長テーブルが一つ、椅子が二つ。電子黒板が大袈裟に壁を占領しているが、それより前にホワイトボードがあり、主にそちらを使っているようだ。

それにしても、なんとという趣味だろう。教室だというのに、まるで美莎の私室にいるようだ。

壁にはピンク紙を切り抜いた花がピンで貼られ、パーティー会場のように子供っぽい飾りが施されている。ホワイトボードも、授業に関係ない端っこが赤や青のマーカで縁どられ、黄色で星が並んでいる。教師はそれを避けて授業し、消さないようにしているのだろう。大した心遣いだ。

キョロキョロと見回していると、父親は時計を見てスツと退室してしまい、彼女と二人きりになった。

トントンとテーブルを示され、空いた椅子におずおずと座ってみる。

「ヨロシクね」

両肘で頬杖を着いて、斜めに見上げられる。

間近で見ると、彼女は可愛いというだけの表現では足りなかった。瞳が凜としていて、気が強そうにも見える。しかし唇は親しげにくるっと弧を描いており、すっぴんの肌には陰りの一つも見当たらない。

桃のような肌だとか、サクランボみたいな唇だとか。

巷で陳腐な表現として捨て去られている言葉が、そのまま当てはまってしまっていた。

しかも、目のやり場に困る点がある。彼女は啓一とそっくり同じ制服を身に着けていたものの、慣れのせいかアレンジがきつかった。インナーを曝し、袖同士をお腹で結んで押さえている。

黒いインナーは女子用で丈が短く、男子のタンクトップとは違い、どちらかというスポーツブラのような形状だった。フィットした胸の膨らみはもとより、引き締まった腹部と臍までが見えてしまっている。

かといって、色気を狙っているとは思えない、素の表情。赤面でもしたら、こっちの負けのような気がしてしまいそうな、無垢な笑顔を浮かべている。

啓一は相当ポカンとした顔をしていたらしく、笑われるまで返事もできなかつた。

彼はその時知らなかつた。

啓一は不用意な一般人代表・尚且つ暇人としてここに連れて来られたことを。

美莎はエリート代表として、幼い頃からここに閉じ込められていたことを。

RHYTHM

到着三日目。早くも辟易する、同じリズムの繰り返し。そしてどんどん楽しみになる、授業時間。

教師は研究施設で働く若いスタッフが、分野別に入れ替わり立ち替わり、シフト制で入ってきていた。教師であるための教師ではなく、どちらかというアルバイトの家庭教師のイメージそのままだ。彼らもツナギを着ていることが多かったが、色は専門別に分かれていたし、白衣を着ていることも多い。

それにしても、楽しいのは美莎との会話。本題の授業にはまったく付いていけず、教師役から苦笑される始末だった。

「俺、パンピー代表なんすからね。大事な生徒が満員になった時、お前ら馬鹿？って笑い方したら、速攻で嫌われますよ」

「そっかそっか。悪かったな」

本格的にステーションが動き出した時、地球から教師も運ばれてくる。しかし一番よく姿を現す大友は、教師を総括して自分も教鞭を振るう予定になっている。落ち零れの啓一の指摘にもフレンドリーに応じてくれているのは、根本的に教えるのが好きなのだろう。

初日にレベルを確かめられた瞬間から、大友は美莎と別カリキュラムを捻り出した。

喋りに幼さの残る美莎は、釣り合いが取れないほど頭が良く、既に一方的に教えられるという意味での授業を超えていた。地球の大学の研究レベルの物理問題に取り組む傍ら、大友と宇宙エネルギーの構成について雑談する余力を持つ、十七歳女子……

学校のような鐘は鳴らないが、アラームで休憩時間は取ってある。啓一が関数の問題に手間取っている間に、大友は研究のために席を外した。

「あー……マジ、キレそう。勉強とか、本当ムリだから」

「マジ」

「マジ！」

「って？」

「って？」

益体もない会話。きょとんとした美莎と目が合い、こちらも思わずきょとんとする。

「何語？」

「何語って？」

「マジ、キレそうって」

「……はあ？」

何を言ってるんだろこの子は。まさかのフェアリー降臨か？

「わかんねえの？」

「わかんない」

「本当にイラついてきて、そろそろ爆発してしまいそうですよ」

「ああ、なるほど！ 数学の問題について、ってことだ」

ようやく謎が解けた、と拍手して、美莎はパックのジュースを飲んだ。

「ていうかさ、どうしてわかんないの？ どこのお譲さま？ むしろ何人？」

「えー……生粋の日本人だけ。周りにスラング話す人、いないもん」

「スラングって……まあ、外人感覚で言えば、スラングって言うのかなあ。でも普通だろ？ 美莎ちゃん、いつここ来たの？」

ふう、っと笑顔の灯が落ちた。それはまさに一瞬で、ニコツと気丈に取り戻す。

「ずっと。私の周りは大人ばかりで、そういう言葉を遣う人はいなかったんだ。ネットなら楽しい情報たくさんあるって知ってるけど、私が与えられるのはローカルだけ。専門の学術書か、そうでもなければ芥川とか？」

あはは、と笑う彼女は、健気で寂しげだった。

対照的に、啓一の上に生じたわだかまり。

十七歳の女の子（しかも絶世の才色兼備！）が、スラング一つ覚えられず、宇宙の塵に紛れている、だなんて。

今の一文は半分冗談として、どんな人間だって、同じ年代の友達と馬鹿みたいにスラング飛ばしてふざけ合うことは、途轍もなく大事じゃないか？

俺が漫画を読んでゲラゲラ笑ってる時に、この子は独りで芥川やら太宰やらを読むしかなかったのか？

俺が蝉を追いかけたり、川遊びして泥にハマったり、太陽浴びて遊び狂ってた時代に、この子はあの無機質なジムやトレーニングマシンで運動して遊ぶしかなかったのか？

ありえねえだろ。

意識しないうち、啓一は同情の色を浮かべていたらしい。

「でも、楽しいんだよ！ 大丈夫！ 大友さんたちみたいな研究員さんたちと、会話が成り立つくらいには追い付いてきてる訳だし」「ずっと、子供は独りだった？」

「佐藤教授は啓一くんを地球に置いてきたけど、うちのお父さんは私を連れて来たかった。母親と離婚したからって事情もあったんだろうし……まあ、いろいろね」

ふうん……と、相槌を終えるしかなかった。

親の事情なんて出されたら、もう意見のしようがない。母親がどうして引き取らなかったとか、こんな果てに来させるくらいなら、他の親戚はいなかったのかとか、不条理に思うこともある。でも現実、彼女はここで成長してしまった。楽しくて堪らないはずの幼少期は過ぎてしまい、引き換えとして莫大な知識を植え付けられたということだ。

滅多になく真面目に怒りながらも、それを美莎本人に示して見せることはないと思えた。

彼女に落ち度はないのだから。

RHYTHM (後書き)

この先、ラストしか決まってない……

間がすっぽ抜けているので、また少々時間がかかるかもしれません

^^ ;

もう少々、お付き合いくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3381h/>

企画作品 A CAGED BIRD（仮）

2010年10月21日02時04分発行